

449 大腸癌切除後の2次癌(異時性重複癌、多発癌)の検討

松山赤十字病院外科

高橋郁雄、松坂俊光、小野原俊博、西崎 隆、田代英哉、岩杉健三、石川哲大、久米一弘

大腸癌切除後の異時性重複癌、多発癌について検討した。初発大腸癌切除例1310例(1978~1995)のうち異時性多発癌9例、異時性重複癌35例37病変を認めた。異時性多発癌は初回大腸切除後平均6年8カ月後に発見された。重複癌は大腸切除後平均5年8カ月後に認められ、臓器は胃癌19病変、肺癌5病変、乳癌3病変、喉頭癌、膀胱癌、膀胱癌各2病変、甲状腺癌、肝細胞癌、胆管細胞癌、白血病各1病変であった。胃癌症例19例中2例は3重複癌(各々喉頭、肝細胞癌)、2例は大腸異時性多発癌であり、発見動機では定期followにより10例が発見されていた。胃癌症例19例の大腸切除後の10年生存率は56%であった。発見動機別にみると大腸切除後の10年生存率はfollow群、非follow群が各々58.4%、57.1%で、胃切除後の5年生存率は68.8%、40%であった。【結論】2次癌を念頭に置いた長期のfollowの必要性が示唆された。

450 結腸癌治癒切除例における術前後レンチナンの治療成績—遠隔成績の検討—

東京医科大学外科 海津清明、中島 厚、加藤孝一郎、馬島 亨、佐藤 晋、藤光康信、坂本啓彰、和田建彦、李 正植、河野守男、米田啓三、青木達哉、小柳泰久

(目的)結腸癌治癒切除例に対してレンチナンを術前後に投与し、その有用性について遠隔成績から検討した(対象)根治度Aの期待される結腸癌60例を対象とし、無投与群のA群28例、2mg投与群のB群12例、1mg投与群のC群8例、8mg投与群のD群12例の4群に分けた(投与方法)レンチナンを2mg・1mg・8mgを術前は2週、1週に2回、術後は2週に1回6ヶ月間静脈内投与した。また、術後化学療法は1群間に共通で5' DFUR(フルウロン)800mg/dayを6ヶ月間経口投与した(研究結果)①背景因子の均一性の検討:宿主因子・腫瘍因子・治療因子に1群間に統計学的有意差は認められなかった($p < 0.05$) ②遠隔成績:再発率はA群5例17.9%、B群2例16.7%、C群1例12.5%、D群1例8.3%であった。3年無再発生存率はA群が85%、B群82%、C群85%、D群が92%であり、8mg投与群は無治療群に比し再発率および3年無再発生存率のどちらにおいても良好な結果を得た。

451 肝転移大腸癌患者における血清IV型コラーゲン7SとIII型プロコラーゲンN-peptide値の意義

三重大学医学部第二外科

北川達士、松本好市、鈴木宏志

【目的】大腸癌肝転移に対して積極的に肝切除術が行われているが、肝の繊維化の指標となるIV-C-7SとP-III-Pの血清値および肝転移巣におけるIV型コラーゲンの発現を免疫組織染色にて調べ、残肝再発と肝転移巣の繊維化との関係を調べた。【方法】1995年12月より1996年6月までに当科において手術療法及び癌化学療法を受けた42名の大腸癌患者を対象とし、IV-C-7SとP-III-Pの血清値と臨床病理学的所見を検討した。肝転移巣のIV型コラーゲンの発現は15名の大腸癌肝転移切除標本を対象とした。【結果】IV-C-7SとP-III-Pの血清値と臨床病理学的所見との関係では肝転移とのみ有意な関連を見、CEAとの関係でも両者に相関を認め、肝転移の程度との関係ではH0,1群に対し、H2,3群で有意に上昇していた。肝転移巣における免疫組織染色では全例に発現を認め、特に強く発現していた8例中6例が死亡していた。以上より、肝転移がH2以上になればこれらのコラーゲン関連分子が血清中で上昇し、肝転移巣における肝線維化が強いものほど再発しやすいことが示唆された。

452 Colorectal carcinogenesisにおけるcell proliferationとapoptosis及びangiogenesisの関連

福井医科大学第2外科¹⁾、大阪医科大学一般消化器外科²⁾青竹利治¹⁾、谷川允彦²⁾、天谷博一¹⁾、松村光啓司¹⁾、加藤泰史¹⁾、下松谷匠¹⁾、堀内哲也¹⁾、村岡隆介¹⁾、

【目的】結直腸の発癌におけるcell proliferationとapoptosisの関連及びangiogenesisの変化を検討した。【方法】26例のcarinoma in adenomaを含む94例のcolorectal polypoid lesionの切除標本に対し、Ki-67、CD34、変異p53、bcl-2の発現を免疫組織染色にて、apoptosisはTUNEL法にて同定した。全腫瘍細胞に対するKi-67陽性腫瘍細胞数をproliferation index(KI)とした。angiogenesisの評価は、CD34染色によるintratumoral microvessel density(IMVD)を用い、全腫瘍細胞に対するapoptotic cellまたはbody数をapoptotic index(AI)とした。【成績】carinoma in adenomaでadenomaとcarinomaの間に(1)AIの有意な減少($P < 0.0005$)、(2)KIの有意な上昇($P < 0.0001$)、(3)IMVDの有意な上昇($P < 0.0001$)、(4)AI/KIの有意な減少($p < 0.0001$)を認めた。AI、KI及びIMVDは変異p53及びbcl-2発現で有意差はなかった。

【結果】colorectal carcinogenesisにおいて、adenomaからcarinomaへの進展の間にcell proliferationの上昇とvascularityの増加とともにapoptotic activityの低下が重要な役割を担っていると考えられた。